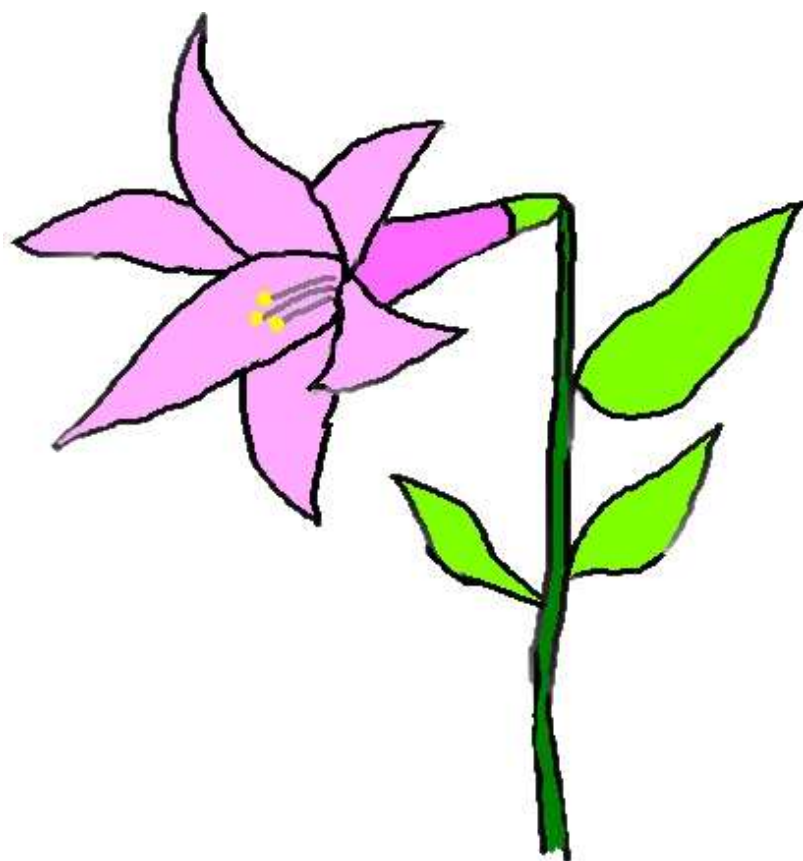


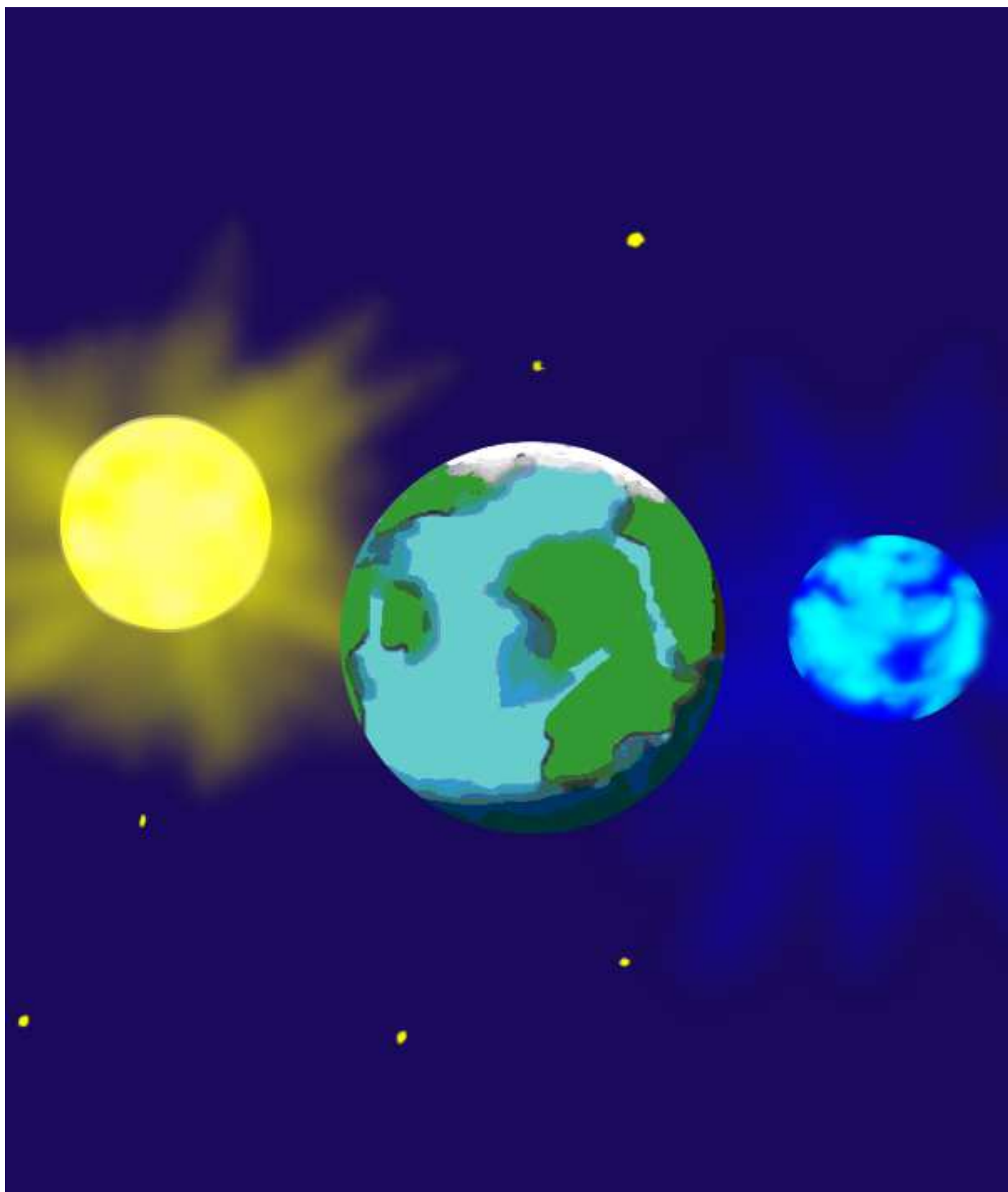
一輪の花

—原爆を滅ぼすもの—



東郷 潤

広い宇宙のある星でのお話です。

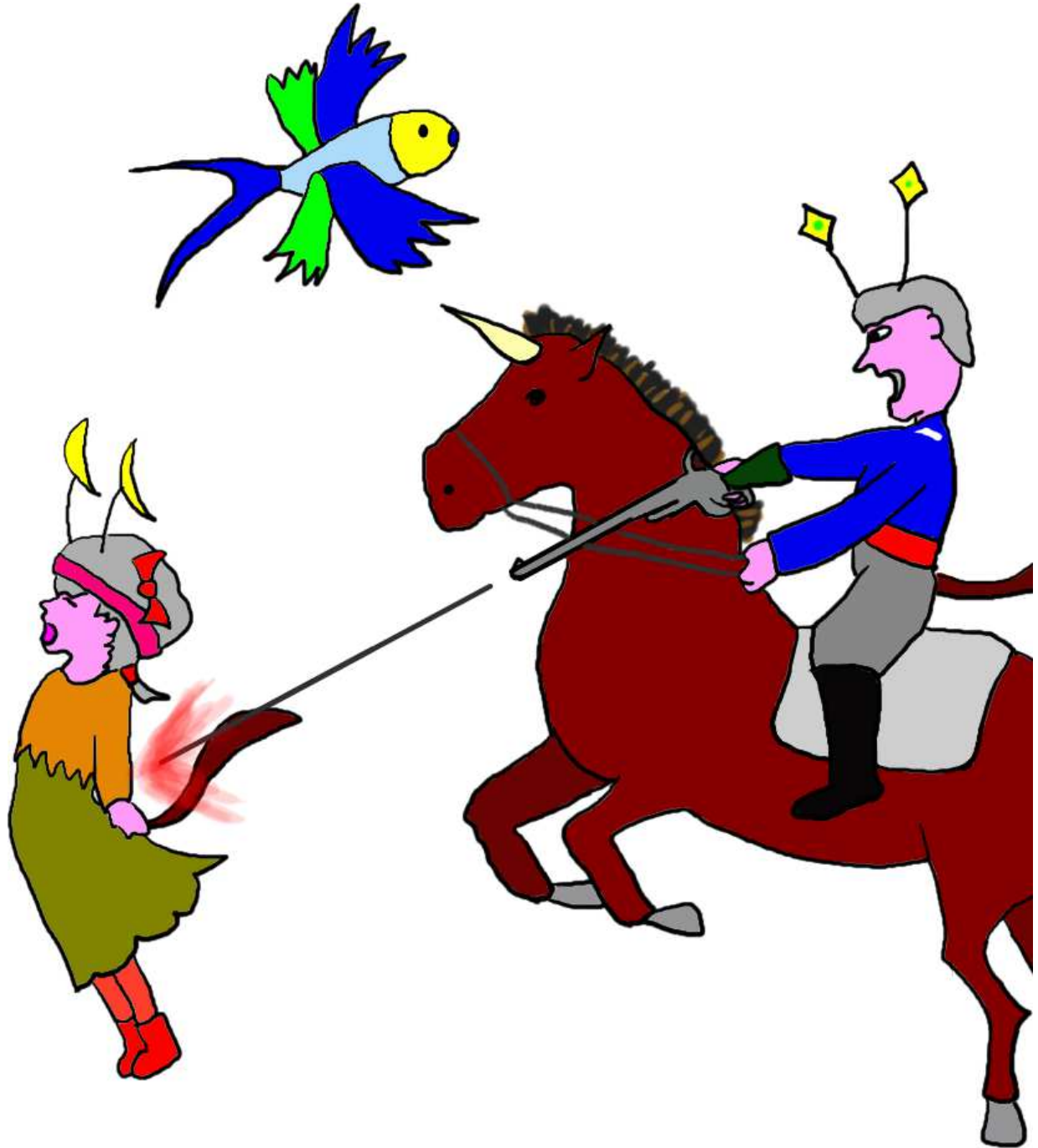


この星は地球ではありません。

海から渡ってきた、ダイヤ形の触角を持つ兵士たちが、三日月形の触角を持つ人々の村を襲っています。

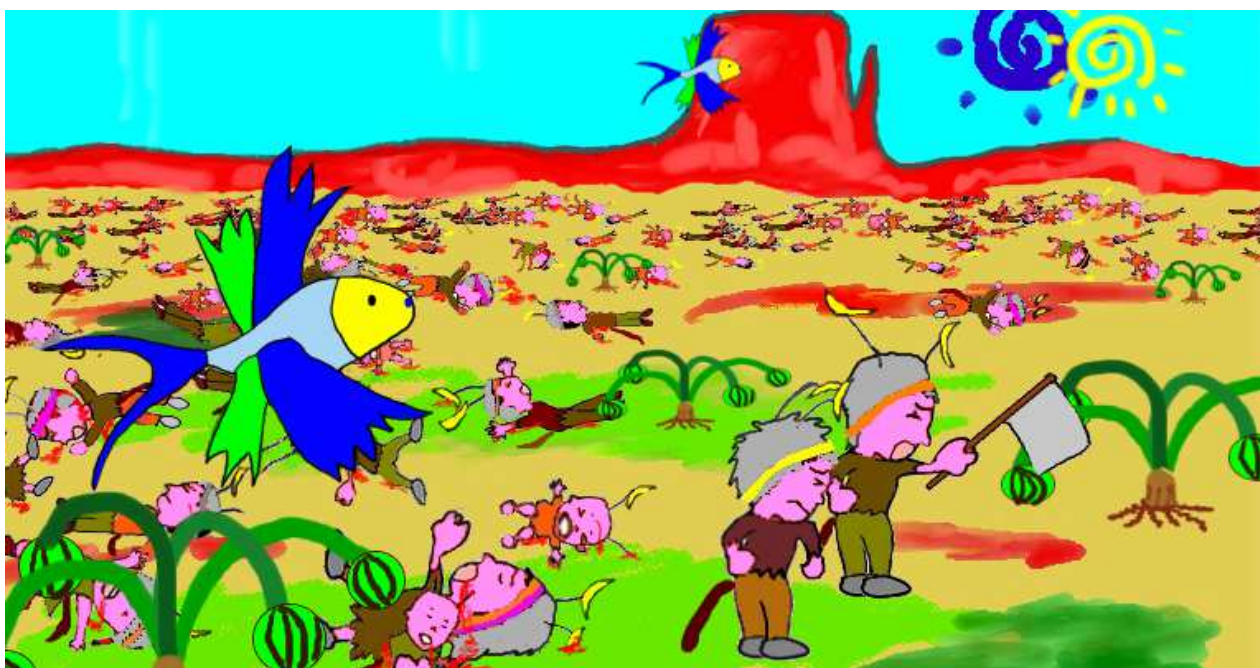


若い兵士が撃った銃弾が、三日月形の
触覚を持つ少女を貫きました。



少女はとても綺麗な子でした。一兵士
は、少し嫌な気持ちになりました。

殺戮は何年も続きました。その結果、三日月形の触角を持つ人々は、ほとんどいなくなっていました。そして、わずかに生き残った人々も抵抗を諦めました。



むろんこの星の人々は、これを見て恐怖に震えました。—そして、同じ目に会いたくないと軍備の増強を始めたのです。

こうして、ダイヤの触角を持つ人々の
新しい国が生まれました。



兵士たちは新しい国の英雄です。みんな大喜び！



実は、彼らの多くは、母国では自由がなく、幸せではなかったのです。

—それから 20 年が過ぎました。

兵士は結婚し、可愛い女の子が生まれて幸せに暮しています。



ある日のことです。「どうしたの、パパ？」少女が聞きました。



「い、いや、なんでもない」彼は、一瞬、娘を自分が殺した少女と見間違えてしまったのです。いつのまにか、娘は、死

んだ少女と同じぐらいの年齢になって
いました。

それから彼は、よくお酒を飲むよう
になりました。



ある日、兵士は、自分の娘が、三日月の
触角を持つ子どもと遊んでいるのを見
つけました。「こらあ、こいつらと遊
ぶな！」彼は思わず娘を怒鳴りつけま
した。



「いいか、よく聞きなさい。こいつらは
劣等民族だ。いずれ滅びさることがき
まっているんだ。我々、ダイヤの触覚を
持つ進化した人間が、全てを支配する

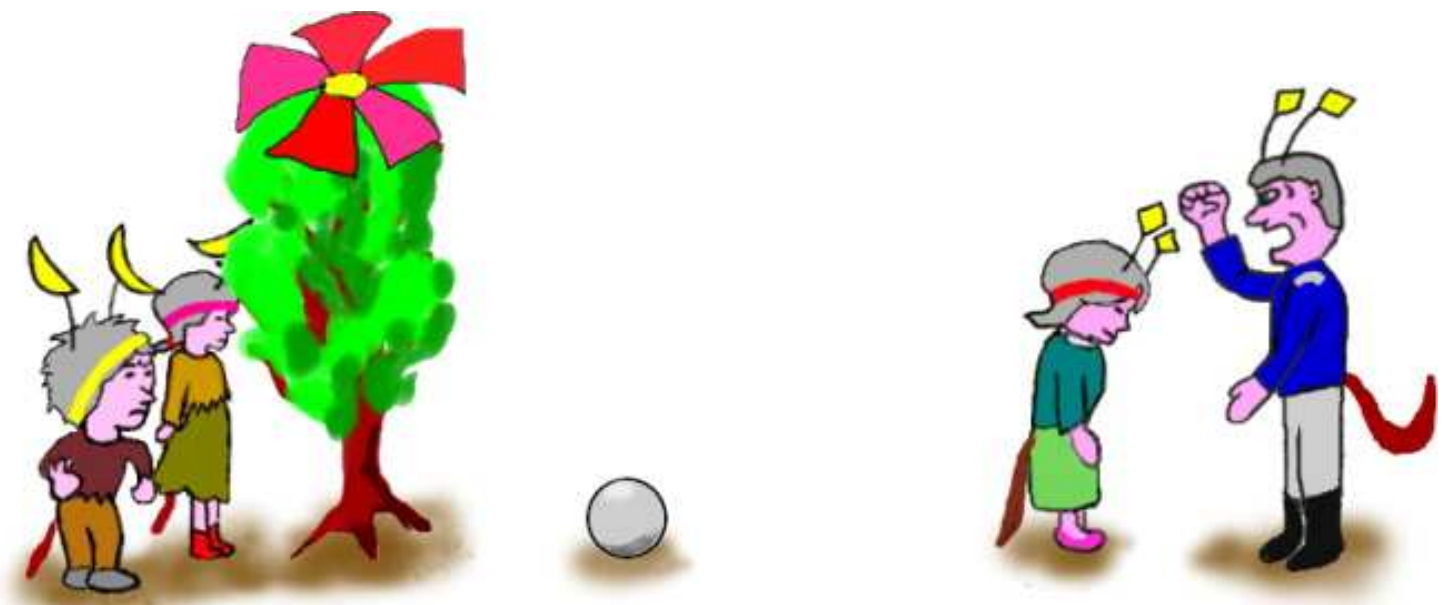
んだ。それは、神様の明白な意志なんだよ！ この世は弱肉強食なんだから！」

「はい、パパ！」

「こいつらと仲良くすることは進化に逆行する、悪いことなんだよ」

「はい、パパ！」

「我々は、正義のために、劣等民族と戦わなければいけないんだよ」 「はい、パパ」



しだいに兵士のお酒の量が増えていきました。

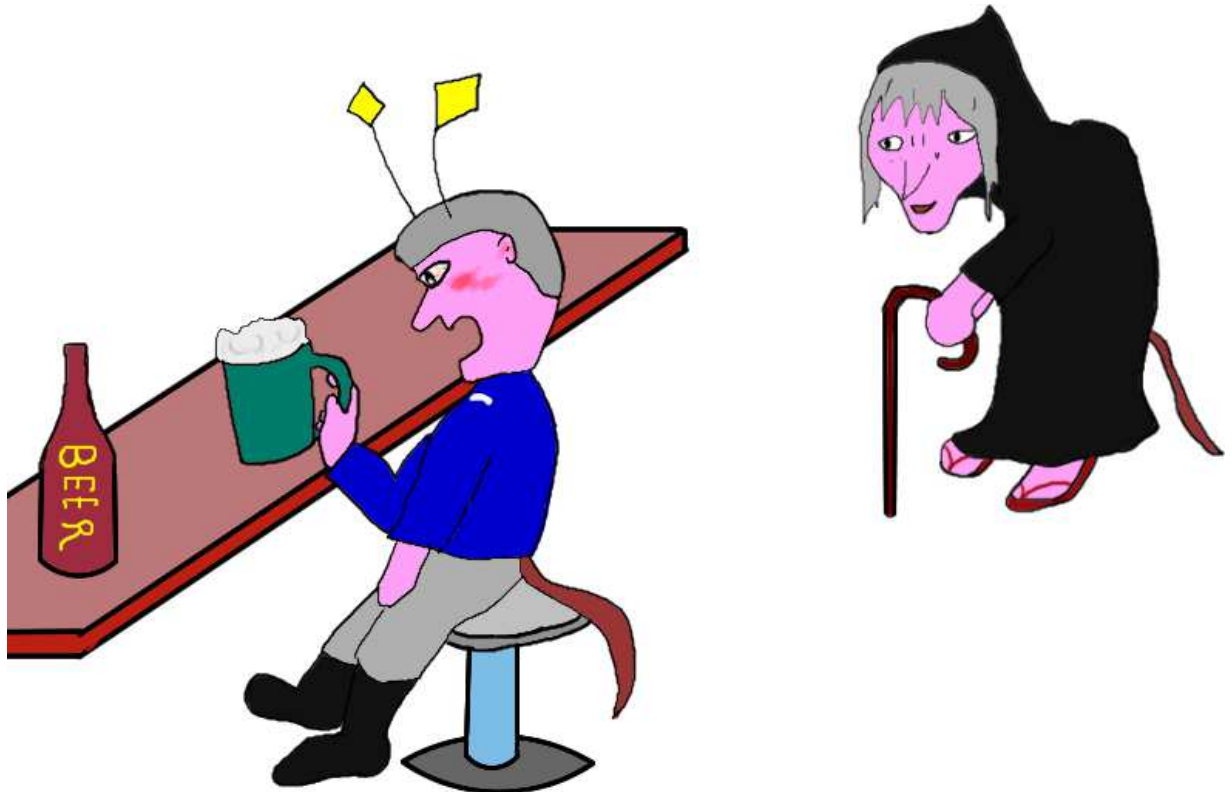


ある日、酔っ払っている彼に、一人の老婆が話しかけて来ました。

「おや、可哀想にねえ。ずいぶん苦しんでいるじゃないか」

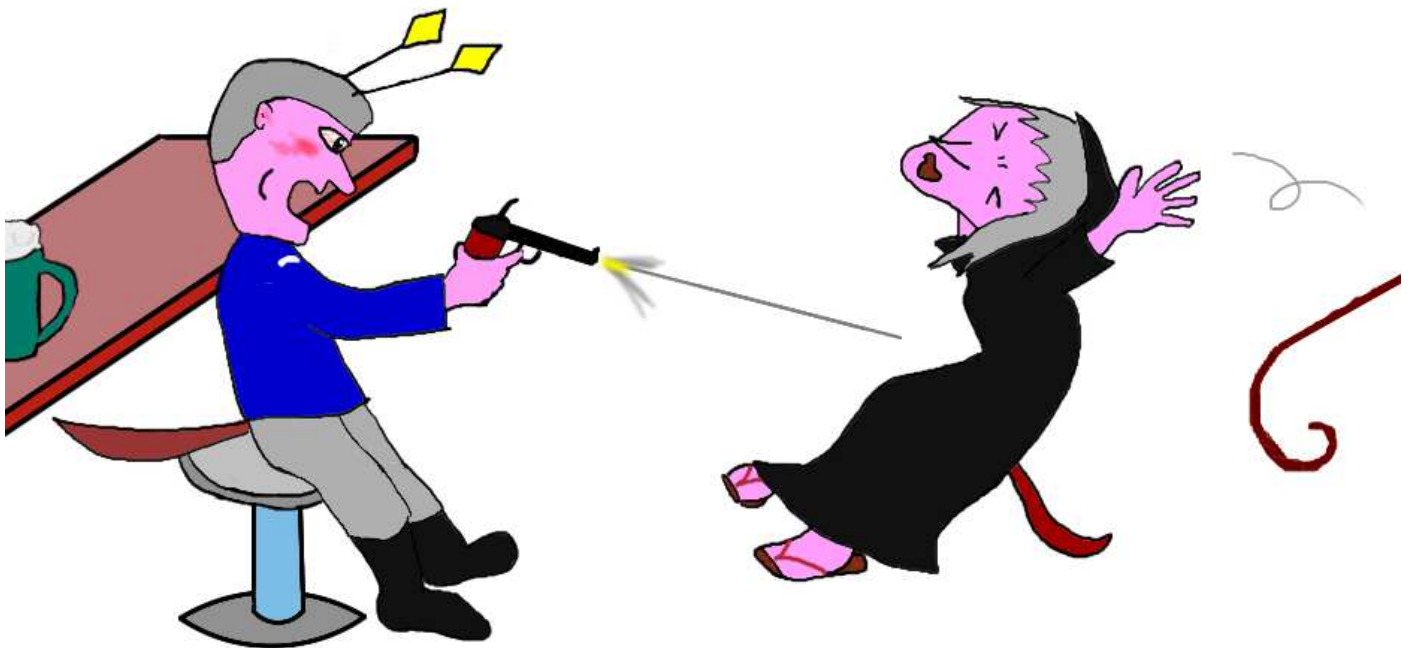
「誰だ？ お前は」

「楽になりたかったらね、自分が殺した人たちに花を手向けるんだよ」



「な、なんだと！」彼はおばあさんを怒鳴りつけました。

「じょうだんじゃない！ 俺は、悪くない！ あいつらは劣等民族だ！ 進化した人間が野蛮人を殺すのは神の御心だ！」 怒った彼は、おばあさんを射殺してしまいました。



その後、兵士はお酒で体を壊し亡くなりました。

—そして、30年が経ちました。

兵士の娘は結婚し、男の子が一人います。



「ねえ、あの人たち、何をしているの？」
お母さんと散歩しているとき、男の子
が指差しました。そこには、三日月の
触覚の、みすぼらしい人たちがいます。



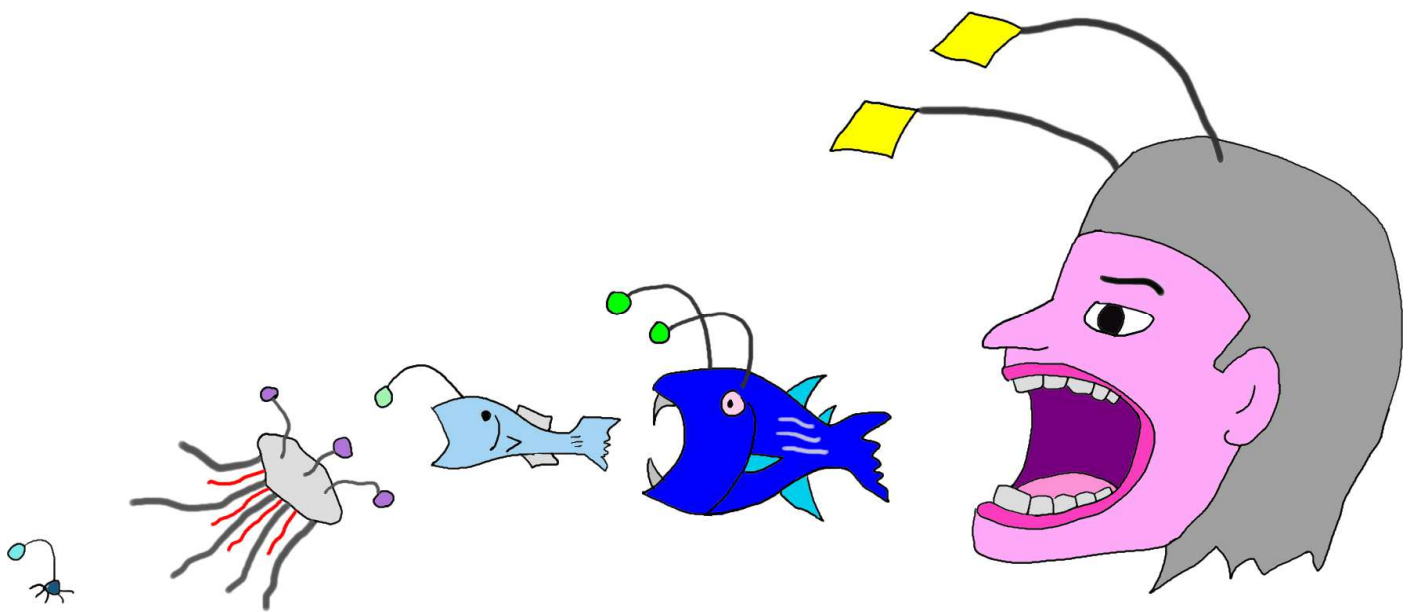
「あの人たちはね、生存競争に負けた
民族なの。仲良くしちゃダメよ！」

「はい、ママ」

「亡くなったお父様は、いつもおっしゃっていたわ。 この世は弱肉強食だって。弱いものは、負けてひどい目に会うの。 それは神様が決めた法則なの。そして最も強い、ダイヤの触角を持つ人間が世界を支配するのよ。—それが神様¹のご意志、つまりは正義なのよ」

「はい、ママ」

¹ 〔注〕「神様」と書きましたが、地球のどの宗教とも関係はありません。



「お父様は建国の英雄だったの。あなたも神様を信じて、人類の進化のために戦ってね。何があっても競争に負けたら駄目よ。負けたら、ああなるの。よく見ておきなさい」

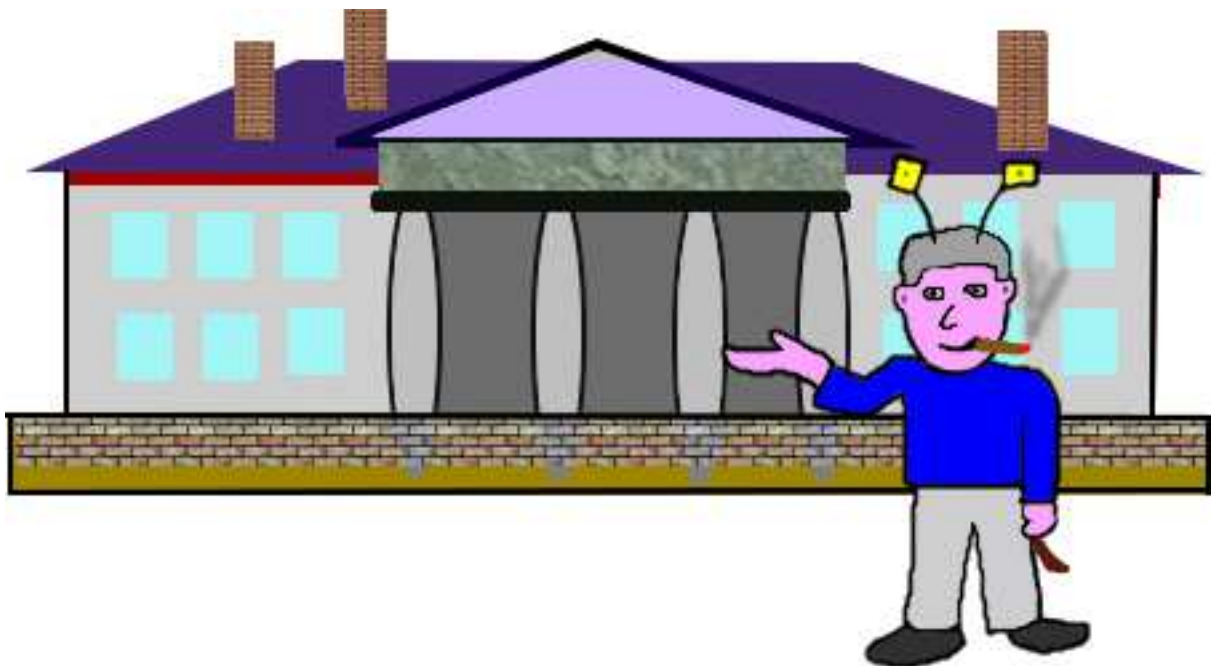


「負けたら、ああなる」・・・男の子
は恐怖に震え、絶対に勝つんだ、と強く
決心しました。

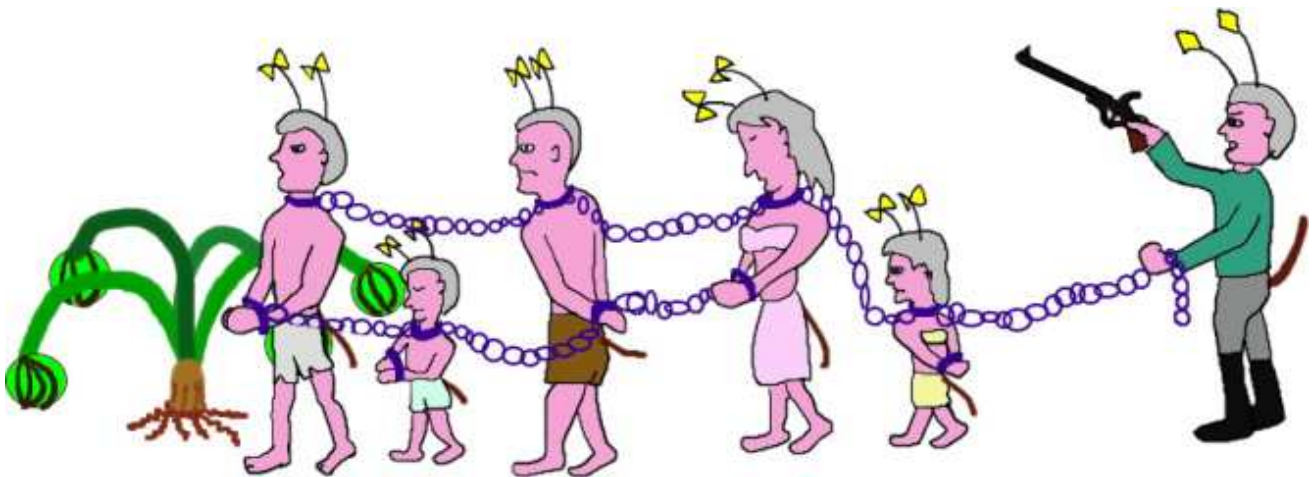
—それから 20 年が経ちました。

男の子はずっと競争に勝ち続け、立派な農場主になりました。

たくさんのお金と奴隷を手に入れたのです。



奴隷は、蝶の形の触角を持つ人々です。
もともと遠い国に住んでいたのですが、
ダイヤ形の触覚を持つ人々に誘拐され
て奴隷にされてしまったのです。

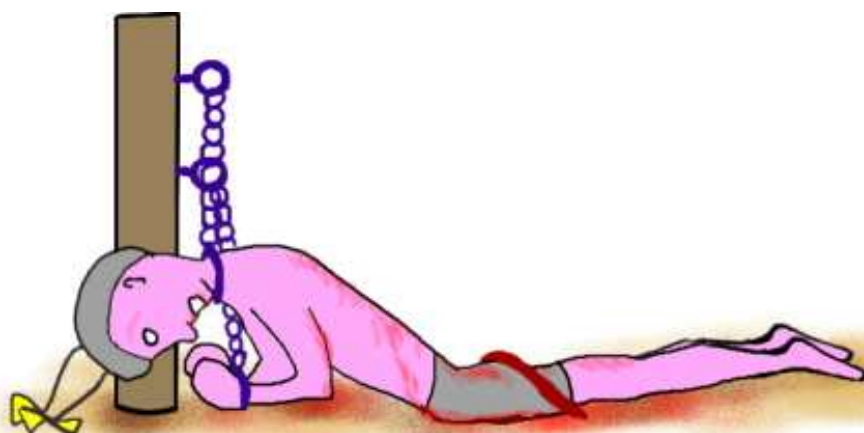


むろん、これを見たこの星の人々は恐
怖に震え、軍備の増大を進めました。

さて、競争に勝つためには、奴隷をぶって働かせる必要がありました。

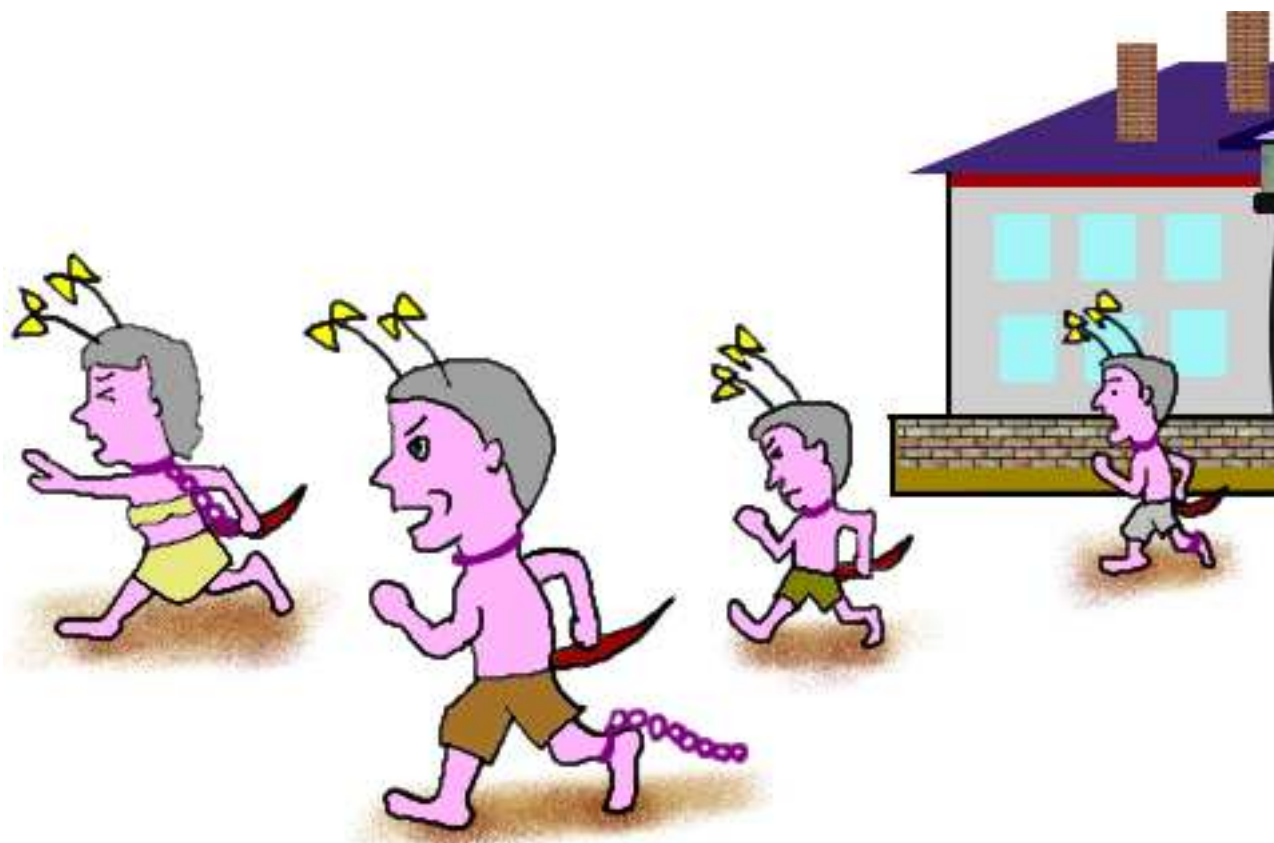


あれ？ どうしたのでしょうか？ 奴隷が動かなくなりました。



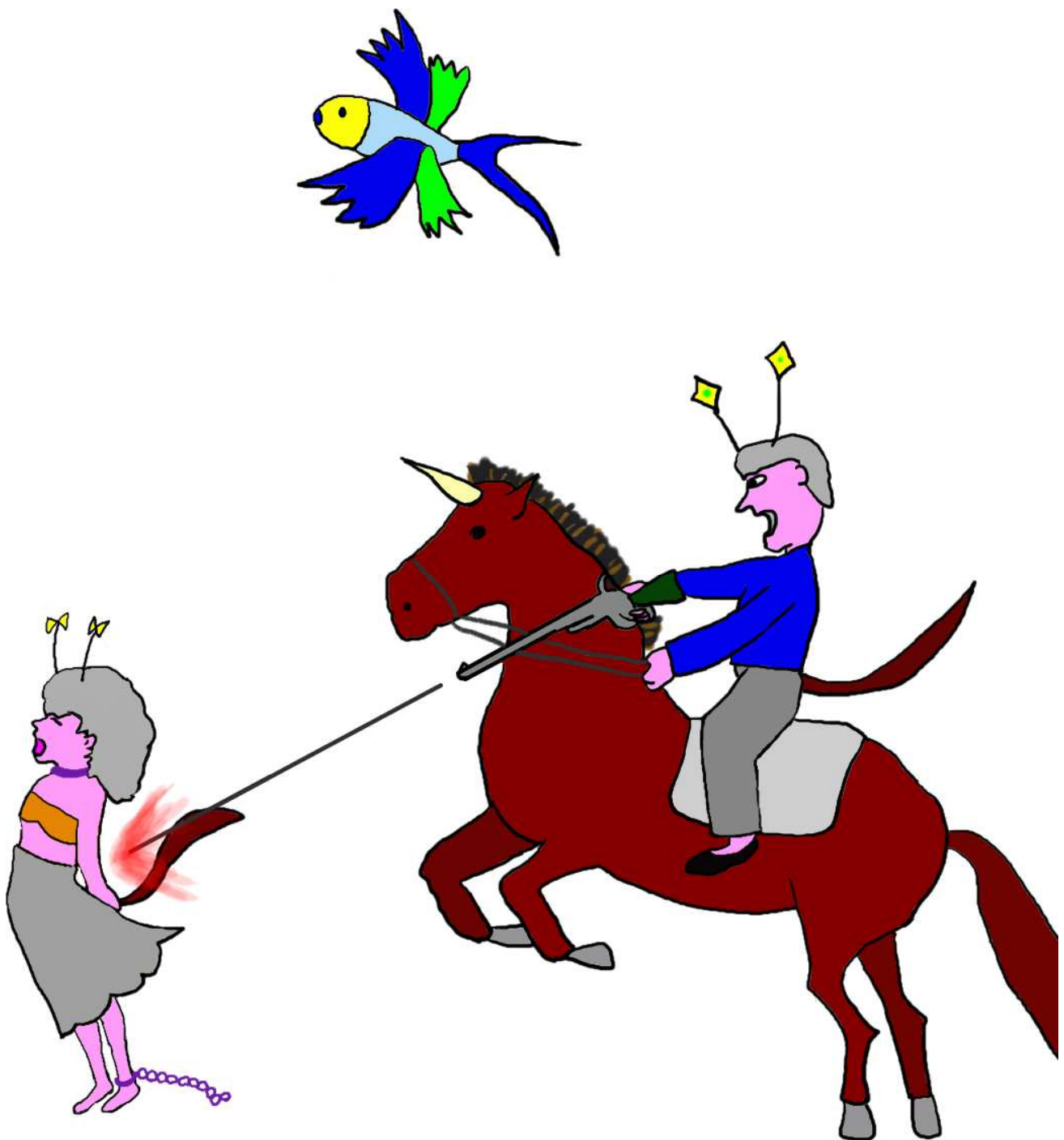
—死んでしまったようです。

翌日、大勢の奴隷が逃げ出しました。

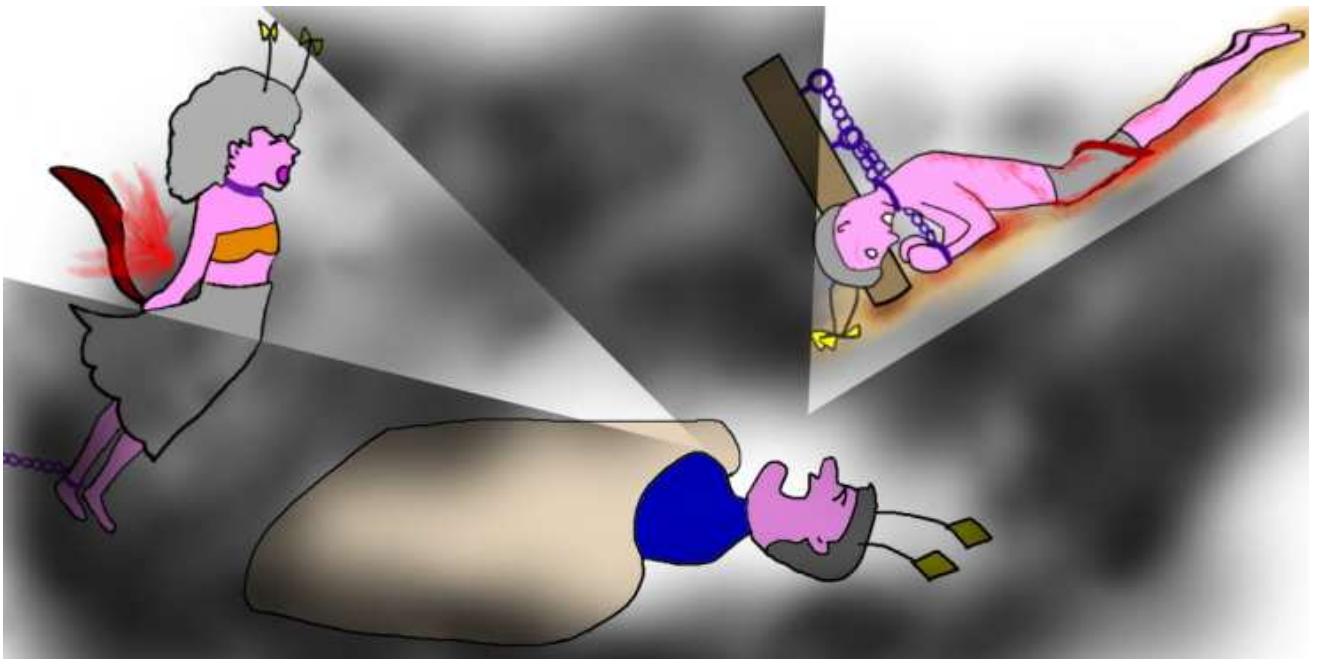


**悪い奴隷に罰を与られないような、
弱い心を持っていたでは生存競争に勝て
ません。**

「こいつら全員、ぶち殺してやる！」
彼は奴隷を追いかけて、女性も子ども
も一人残らず、射殺しました。



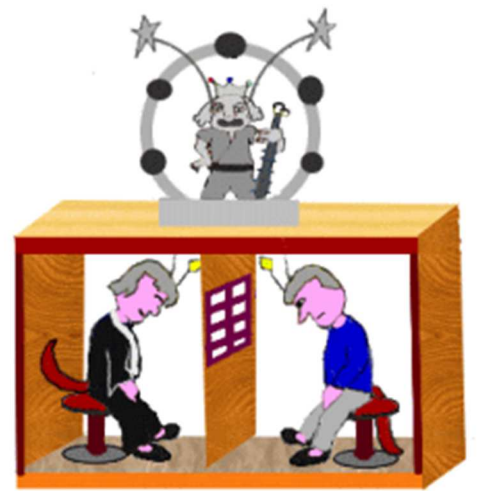
その後、彼は、悪夢や幻覚に悩まされるようになりました。…でも、彼はお酒を飲んで忘れることは出来ません。彼のおじいさんが、お酒で早死にしていたからです。



そこで、彼は教会へ行きました。神様に罪を告白し、守ってもらおうと考えたのです。

「私は、大勢の奴隷を射殺しました。だって、あいつらは逃げ出したから仕方が無かった。秩序を乱すことは悪い事です。悪を罰さなければ、文明を守ることとは出来ません」

「よく告白してくださいました。神の許しを請いましょう。祈るのです」²

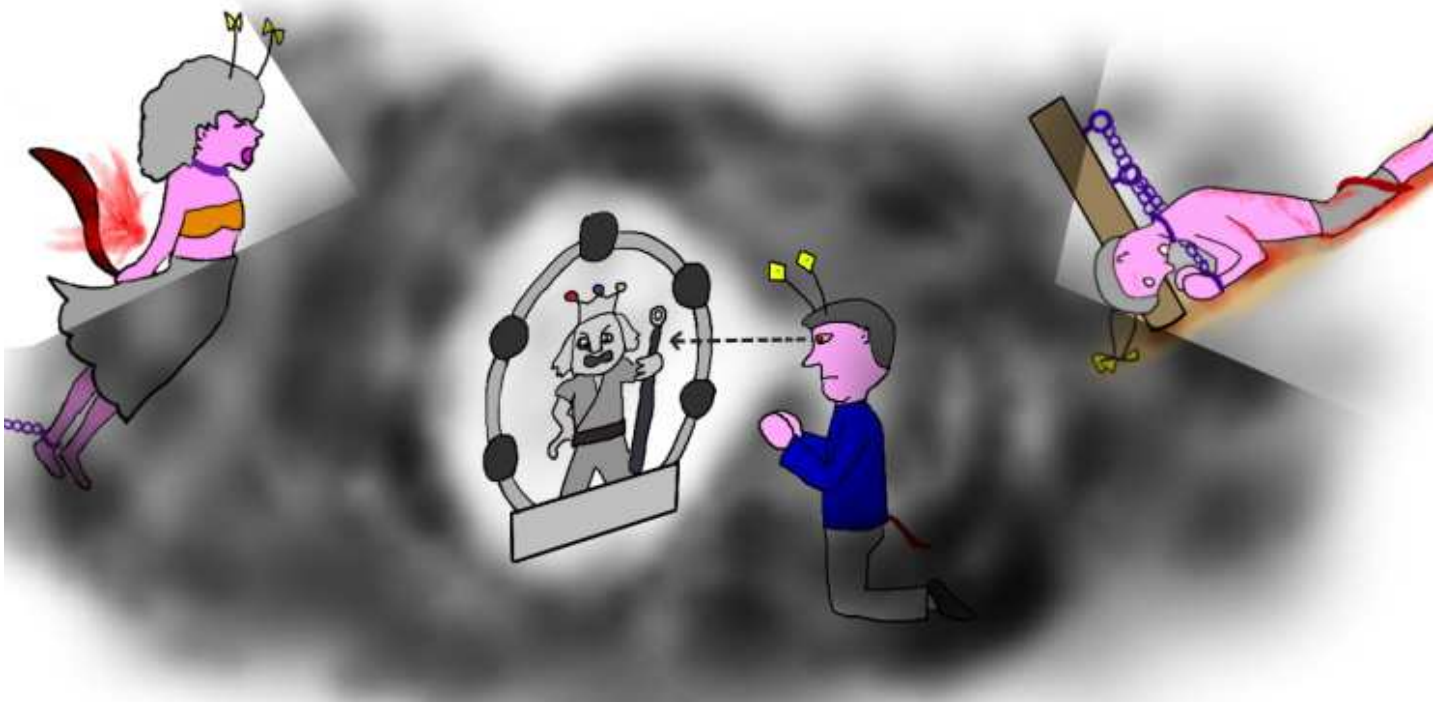


² 〔注〕読者の中にはキリスト教の新約聖書にある、以下の記述を連想される方がいらっしゃるかも知れないが無関係です。念のため。

●わたしたちが自分の罪を告白するなら、神は忠実で義なる方ですから、わたしたちの罪を許し、わたしたちを全ての不義から清めてくださいます。（ヨハネ第一 1：9）

「神様、どうかお許してください」

「これであなたの罪は許されました。
神様があなたをお守りくださいます」
その後、彼はいつもお祈りをするよう
になりました。お祈りをしている間は、
神様のことしか見えません。だからそ
の間は、恐ろしい幻覚を見ることは有
りません。



でも、悪夢を止めることは出来ませんでした。一眠る事が怖くて寝不足が続き、少しずつ頭がおかしくなってきました。

ある日のこと、彼が眠らないよう、教会でお祈りをしていると、一人の老婆が現れました。



「可哀想に。ずいぶんと怖がって、苦しんでいるんだね」

「何だ、お前は！？」

「もし楽になりたければ、あなたが殺した奴隷たちに花を手向けるんだよ」

「じょうだんじゃない！ 俺は、悪くない！ 逆らって逃げ出したあいつらが悪い！！ この世は弱肉強食なんだ！ それにもし俺に罪が有ったとしても、それはもう、神様に許されているのだぞ！」

「あなたを非難しているのでは無いのですよ。私はあなたのために・・・」

**うるさい！
ばばあ！**



こうして農場主は眠ることが出来ず気が狂って亡くなりました。

—そして、30年が過ぎました。亡くなった農場主の孫が、新聞記者になっています。

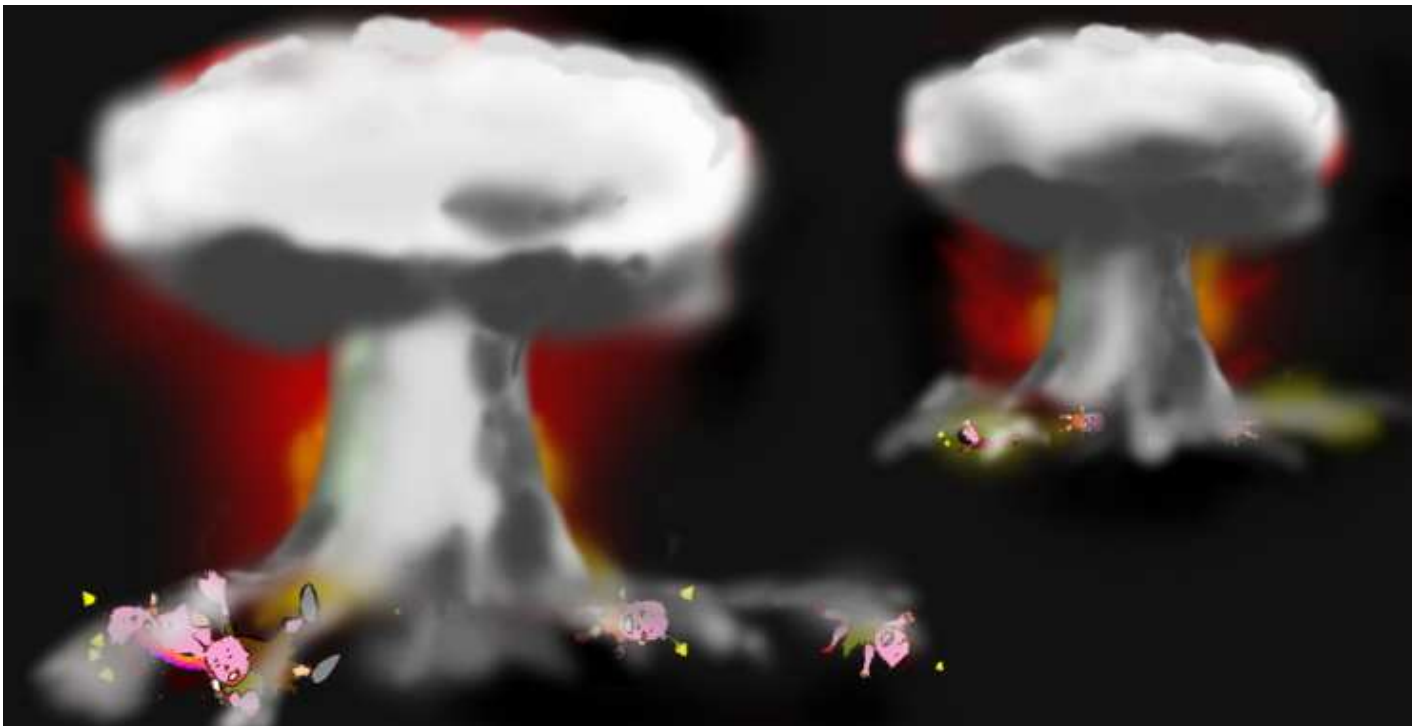
ダイヤの触角を持つ人々の強大な国は、
三角の触覚を持つ人々の小さな国と戦
争をしていました。

「俺たちは自由と正義のために、悪を
滅ぼさなければいけないんだ！」

新聞記者の彼は、連日、新聞に書き立て
ました。



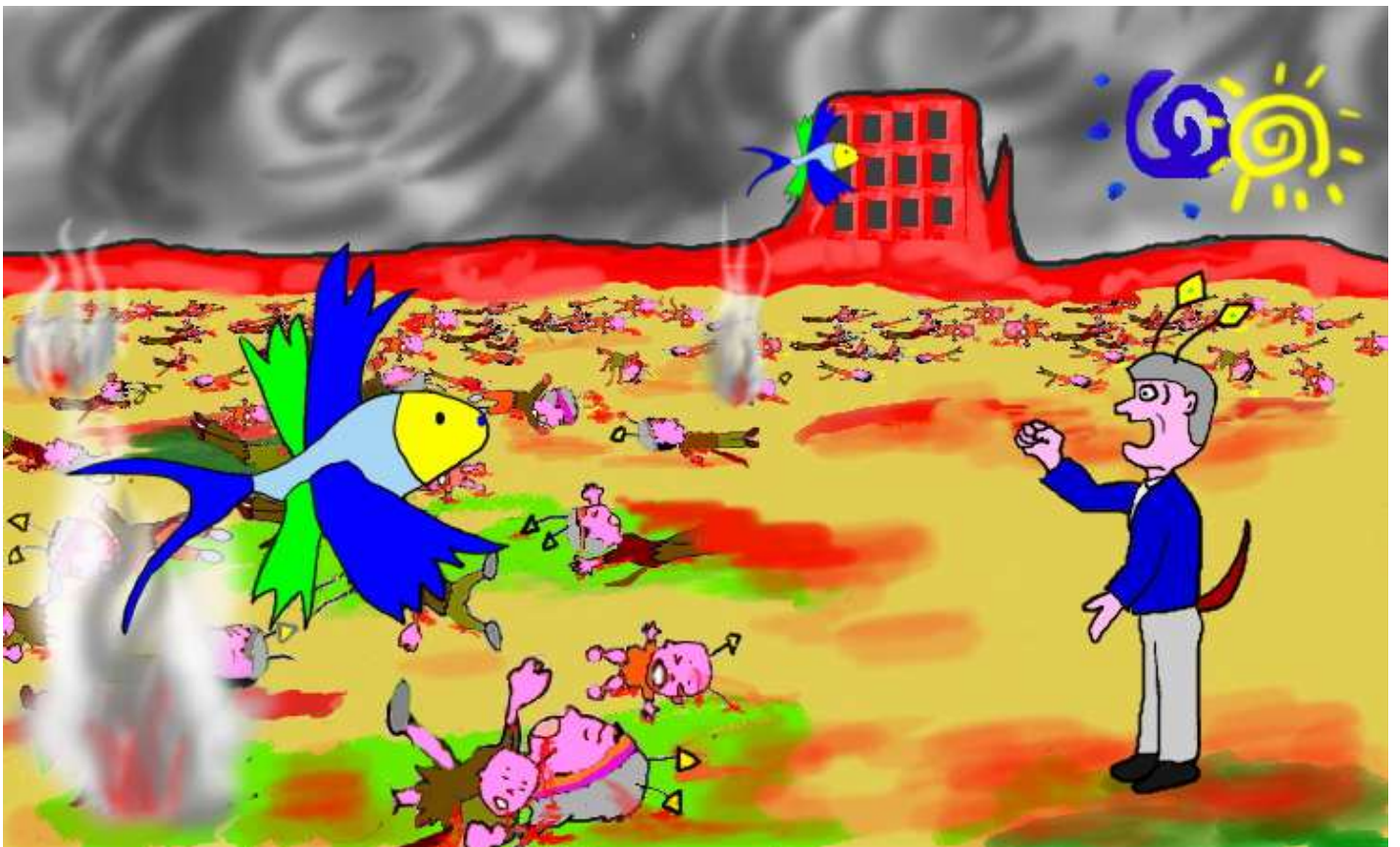
彼の国は、敵の2つの都市へ原爆を落としました。—そして、何十万人という人々を殺しました。



三角の触覚の人々は降伏しました。むろん、これを見て恐怖に震えたこの星の人々は、同じ目に会いたくないと、核兵器の開発を始めました。

新聞記者の彼は、原爆の被爆地―焼け野原―を視察しました。

無数の死体が転がっています。生き残った人たちも、放射能の影響でバタバタと死んで行きます。



その後、彼はドラッグに溺れるよう
になりました。



ある日、老婆が現れました。

「可哀想に。こんなに怖がって、苦しんで・・・。 あなたたちが原爆で殺した人たちのお墓に、花を手向けてごらん」



「何を！？ 三角野郎に頭を下げるというのか？ ふざけるな！ 原爆投下でわが国の百万人の若者の命が救われたんだ！！ それに、原爆投下は、国際法上も何の問題も無かった。 いいか、

あいつらは悪だったんだ。それとも俺
たちが悪だとでも言うのか？」

「あなたが悪だなんて言っていないわ。
私は、ただ延々と同じことを繰り返す、
あなたを助けたくて…」

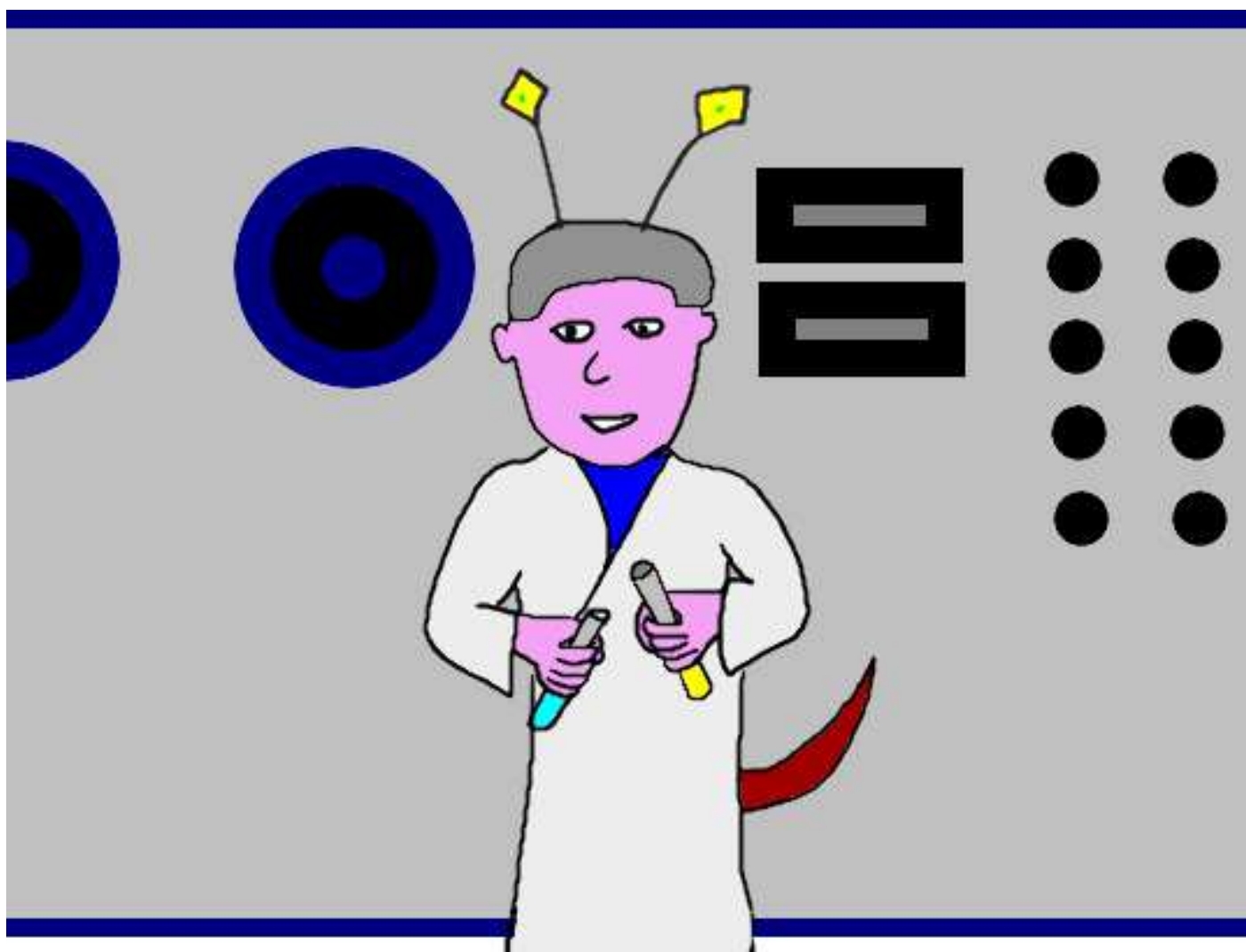
「ばかやろう！　俺たちは正義のため
に戦ったんだ！」

彼はおばあさんを突き飛ばしました。



その後、新聞記者は麻薬中毒で亡くなりました。

—そして、30年が経ちました。新聞記者の孫が、軍の科学者になっています。彼の研究は枯葉剤です。



ダイヤの触覚を持つ人々が作った国は、
今度は、核兵器を持たないジャングルの
小さな国と戦争をしています。 彼が
作った枯葉剤は、飛行機でジャングル
に散布されます。そうすると畑も木も
枯れて、敵の食料が無くなり、ジャング
ルに隠れることも出来なくなるのです。



その枯葉剤は人間にとっては毒となり
ます。

その毒の影響で、多くの奇形児が産まれました。



むろん、これを見て恐怖に震えたこの星の人々は、同じ目に会いたくないと核兵器の開発や軍事力の増大に励みました。

その後、科学者は、お酒をたくさん飲む
ようになりました。



ある日、一人の老婆が現れました。

「可哀想に。こんなに苦しんで・・・。
楽になりたいければ、あなたの枯葉剤の

犠牲になった人たちに、花を手向ける
んだよ」



「え、花を？」

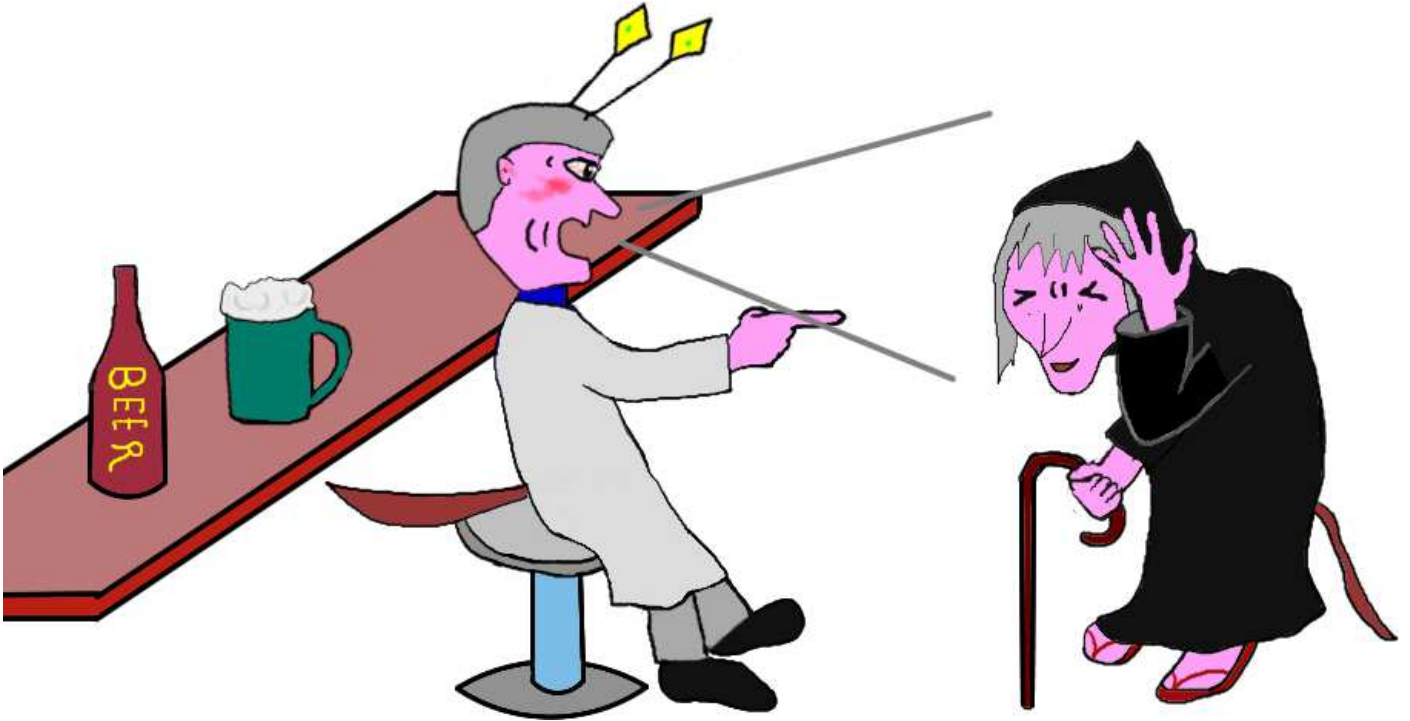
「そうじゃ。お墓へ行って、花を手向けるのじゃ」

一瞬、耳を傾けました。けれど…、激しい恐怖で胸が締め付けられました。

「じょ、じょうだんじゃない！ 悪いのはあいつらだ。俺たちは、自由と民主主義のために、命がけで戦ったんだ！

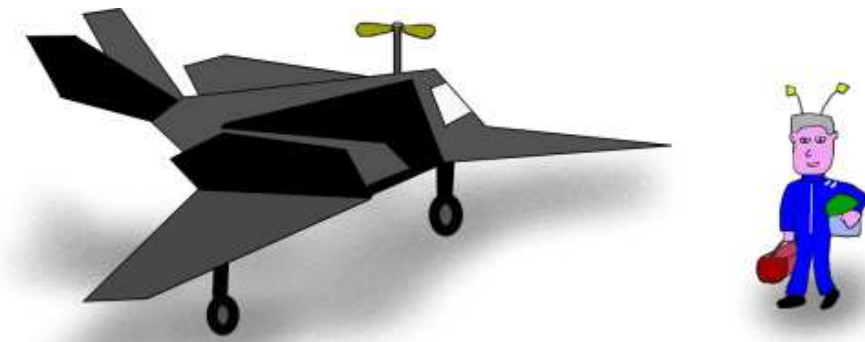
枯葉剤を使ったお陰でわが国の大勢の兵士の命が救われたんだ。敵を殺すのは当たり前じゃないか。 悪と戦い、国益を守るのは、市民の神聖な義務なんだ。それに、もし競争に負ければ惨めに殺されるだけだ。力の無い正義など、存在しない！」

彼は、老婆を怒鳴りつけました。



その後、科学者は、お酒を飲みすぎて亡くなりました。

—そして、30年が過ぎました。科学者の孫が、空軍のパイロットになっています。



彼は、子どもの頃から、建国の英雄の子孫として、正義のために悪と戦うことに憧れていました。

—むろんそれが、彼が子どもの頃から受けた教育だったのです。

「この国は建国以来、常に正義のために悪と戦ってきた。

お前たちも、正義のために戦え」と。

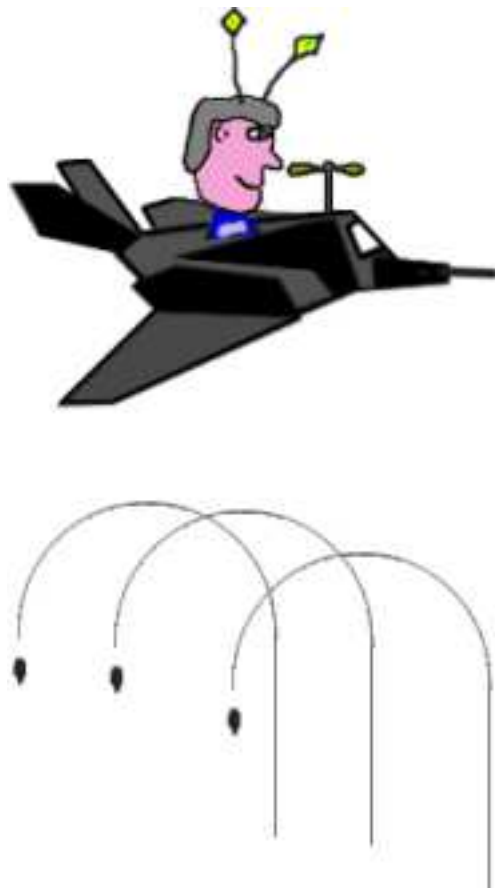
テレビや映画の正義のヒーローたちも、
みな悪と戦っていますよね！



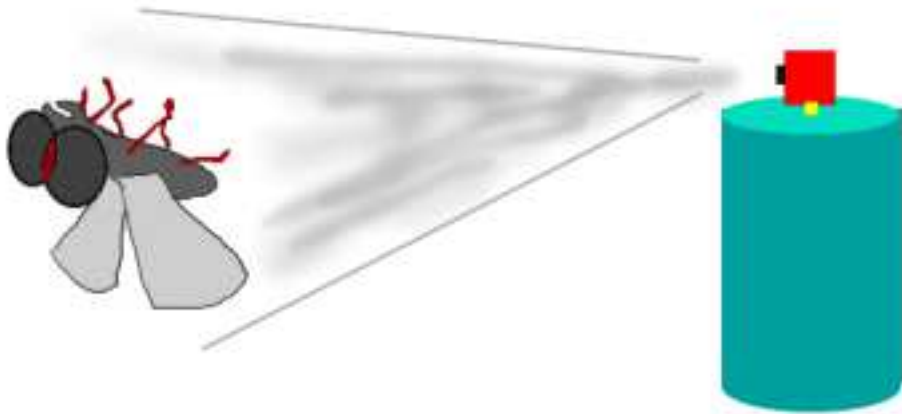
さて、ダイヤの触覚を持つ人々の強大な国は、今度は遠い砂漠の、核兵器を持たない小さな国と戦争を始めました。これでついに、彼も立派なご先祖たちと同じように、正義のために戦えるのです。彼は喜び勇んで、上空から、爆弾をたくさん落としました。



敵も打ち返してくるようです。でも、敵の弾は、はるか上空を飛ぶ彼の飛行機には全く近づくことは有りません。彼は、簡単に、安全に、大勢の敵を殺しました。

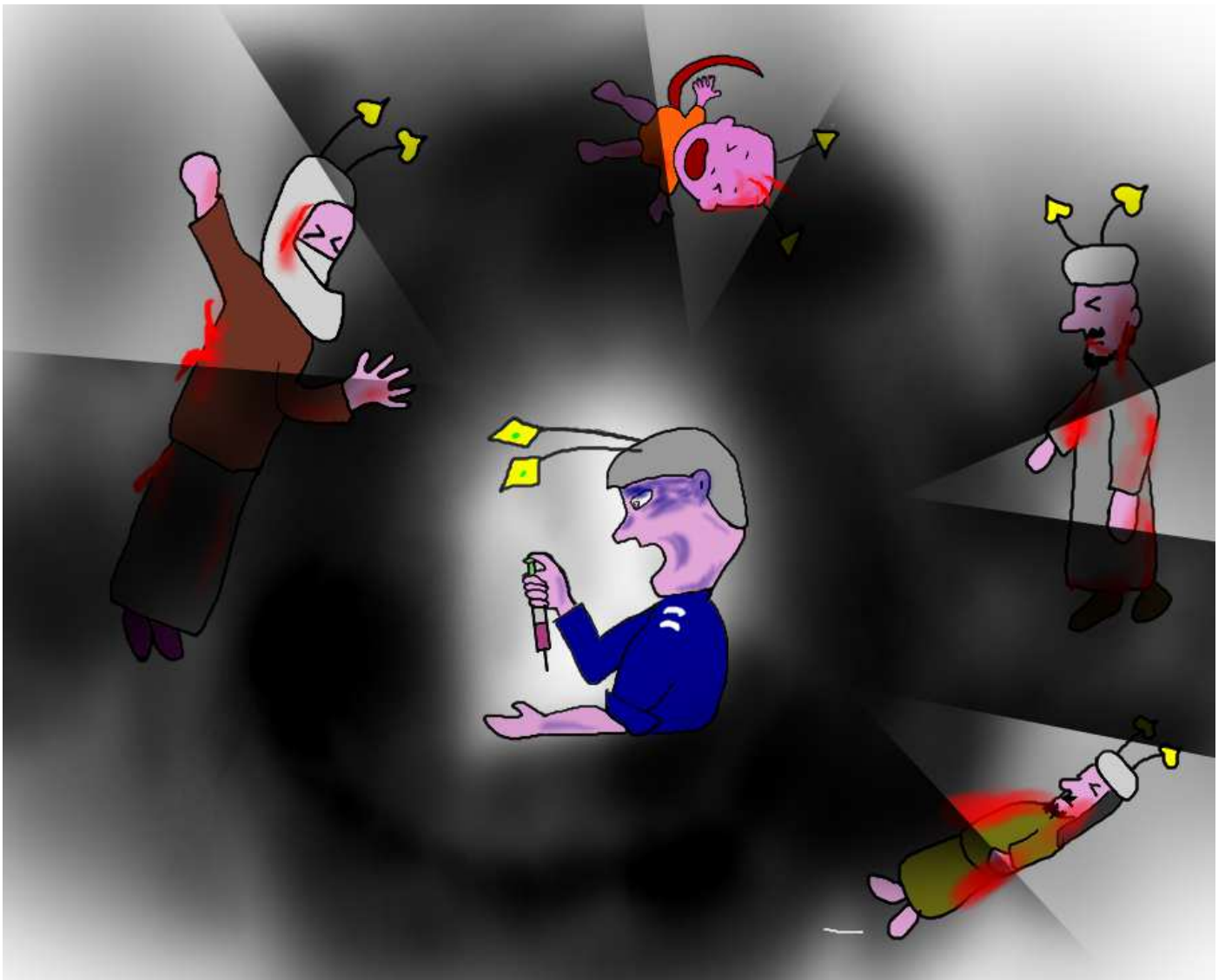


「これって戦いじゃない。ただの一方的な殺戮だ。殺虫剤でハエを殺すのと変わらない」 そう思った彼は、急に気持ちが悪くなりました。



一方で、これを見たこの星の人々は恐怖に震え、核兵器の開発、軍事力の増大に努めました。

さて、砂漠からの帰国後、彼はドラッグを使うようになりました。おじいさんがお酒で早死にしていたので、お酒は飲めなかったのです。



ある日、老婆が現れました。

「可哀想に。こんなに怖がって、苦しんで……。楽になりたかったら、お前が殺した人々へ花を手向けてごらん。」



「貴様、俺に謝れというのか！ ふざけるな！ 俺は悪くなんかない。俺は、自由と民主主義と人権と正義のために戦ったんだ！」

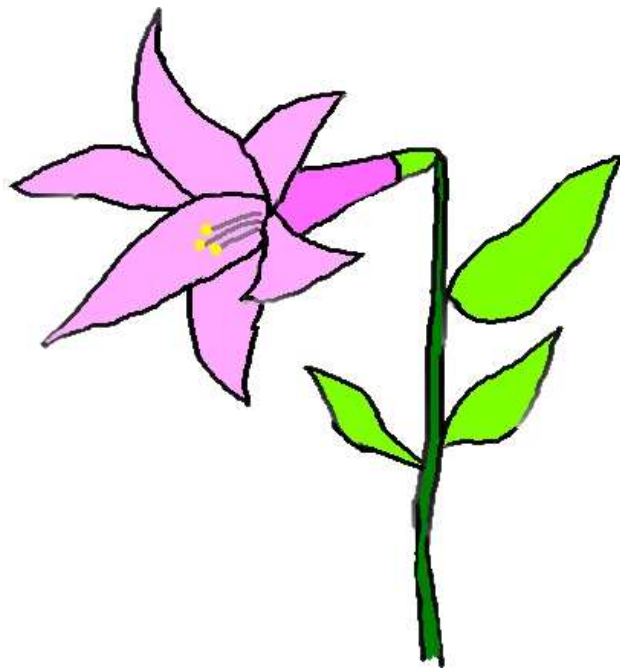
「分かっているわ」

「え？」

「あなたが悪人だなんて、誰が言ったの？」

「だって、お前は花を手向けろと言うじゃないか！」

「そうですよ。私は、花を手向けなさい
といているだけですよ」



「つまり、俺が悪いから、謝れということだろう！？」

「そんなこと、一言も言っていないわ。花を手向けなさいといっているだけ」

「…どういうことなんだ？」

「あなたが悪だなんて言っていないの。相手への自然な同情の気持ちを抑えるなって言っているだけ。自分の愛を抑えて、どうするの！？」

「自分の愛だって？」

「そうよ、自分の愛よ」

「…だけど、謝罪しようにも、相手はもう死んでいるんだぞ！」

「相手が生きていようが死んでいよう
が関係ないわ。 謝罪は、自分のた
めにするものなのよ。 あなたを苦
しめているのは、悪霊なんかじゃない
わ。あなたは、あなた自身の愛と戦って
いるの。 —まだ、分からないの？ 早
く、目を開けなさい！」

「・・・」彼は長いこと、黙りこみました。



「花を手向けるだけで良いのか？」

「そうよ」

「花を手向けても、…俺は、地獄に落ちないのか？」

「当たり前でしょう！」

本当に、花を手向けるだけで、楽になれるのか？」

「なれるわ。…たった花一輪のことで、何を怖がっているの？」

「…」

「いったい誰が、永遠に自分自身の愛に逆らえるというの？」

彼は、砂漠の国へ戻りました。



彼を、大勢の市民が睨みつけました。



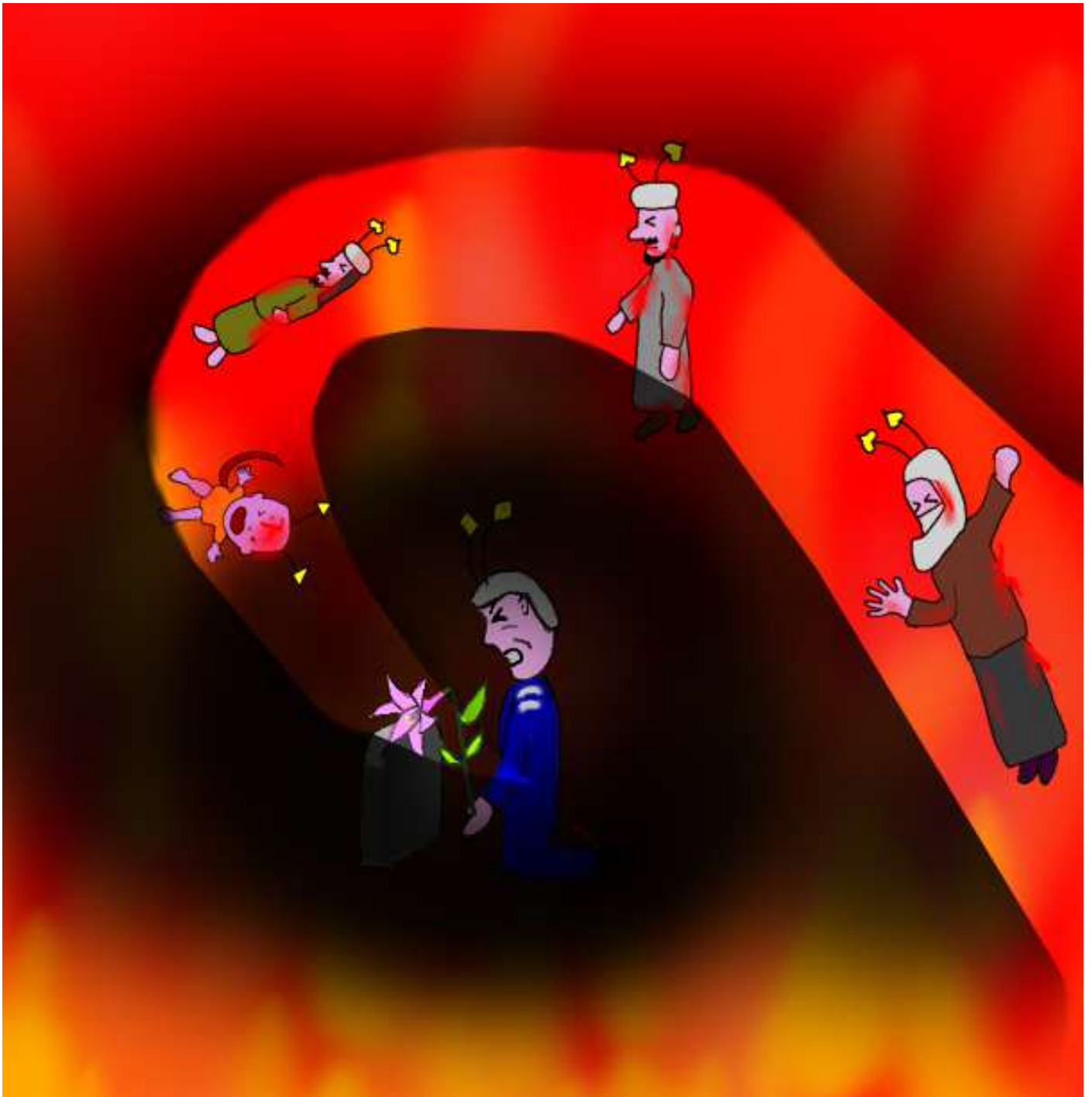
彼は、自分が爆弾を落とした場所へ行きました。そこには、墓らしきものがありました。市民が大勢集まって来ました。



彼はお墓へ花を一輪手向けて、黙祷をしました。



花が心の壁に穴を開け、そこからイメージがなだれ込んで来ました。



イメージの中で、人々が火に焼かれて死んでいきます。その人々の痛みが、本物の苦痛となって彼に襲い掛かってきます。



その痛みは耐えがたいほどのものでした。でも、彼は歯を食いしばって、花が開けた心の壁を開き続けたのです。

もう、目をつぶって、自分を暗闇に閉じ込めたくはない！

私には、あなたたちの
痛みが分からなかった。
一生懸命、目をつぶっていたのです。
でも私は今、心の目を開き、
あなたたちの痛みを
感じています！



ああ、ごめんなさい。
どうか許して！

いつのまにか彼は叫んでいました。

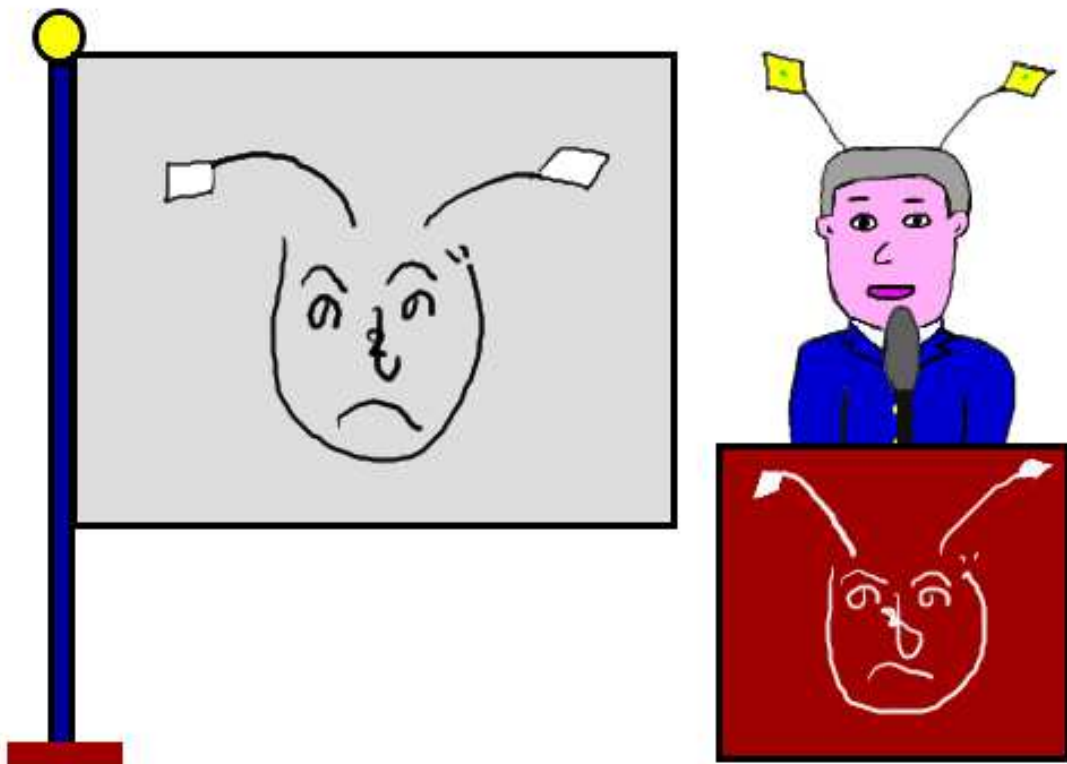
—どれぐらいの時間が経ったのでしょうか？

ふと気づくと、自分の回りに大勢の市民がいました。市民たちは、みな、涙を流しています。彼も市民たちと一緒に泣きました。



—それから20年が経過しました。彼はもうドラッグを使うことは有りません。

多くの人々に好かれた彼は、とうとうダイヤの触角を持つ人々の国の大統領となっていました。



ある日の閣議で、彼は他の大臣達へ言いました。

「わが国の建国、人種差別、戦争の犠牲となった人々みんなに、国を代表する大統領として花を手向けたい」



大臣たちは、それを聞いてゾッとしました。そんなことをしたら国民に殺される、…そう思ったのです。

大臣たちは、口々に反対しました。

「もし、我々に何か罪があるなら、神に告白し、神に懺悔すれば良い」

「亡くなった人間に花を手向けたって、そんなもの、何になるんだ？ それとも、霊なんて非科学的なものを信じているのか！？」

「国家としての威信が傷つく！ みんなわが国を馬鹿にするぞ！ あんたは大統領のくせに、わが国の正義を否定するのか！？ まさか、わが国が悪だとでも言うのか！？ もし謝罪なんかしたら、俺達が悪になってしまう。悪は地獄に落ちるんだぞ！」

**「そうだ！ 我々は常に正しい！
我々の敵は、常に悪だ！」**

**「そんなことよりも、核兵器を増やさ
ないと」**

**「そうだ、あの国も、この国も原爆を持
っている。原爆を持つ国はどんどんと
増えているんだ。わが国は、敵の何倍も、
もっともっと核兵器を持たないと」**

**「そうだ、圧倒的な量の核兵器だけが、
わが国の自由と安全と正義と人権と民
主主義を守ってくれるんだ！」**

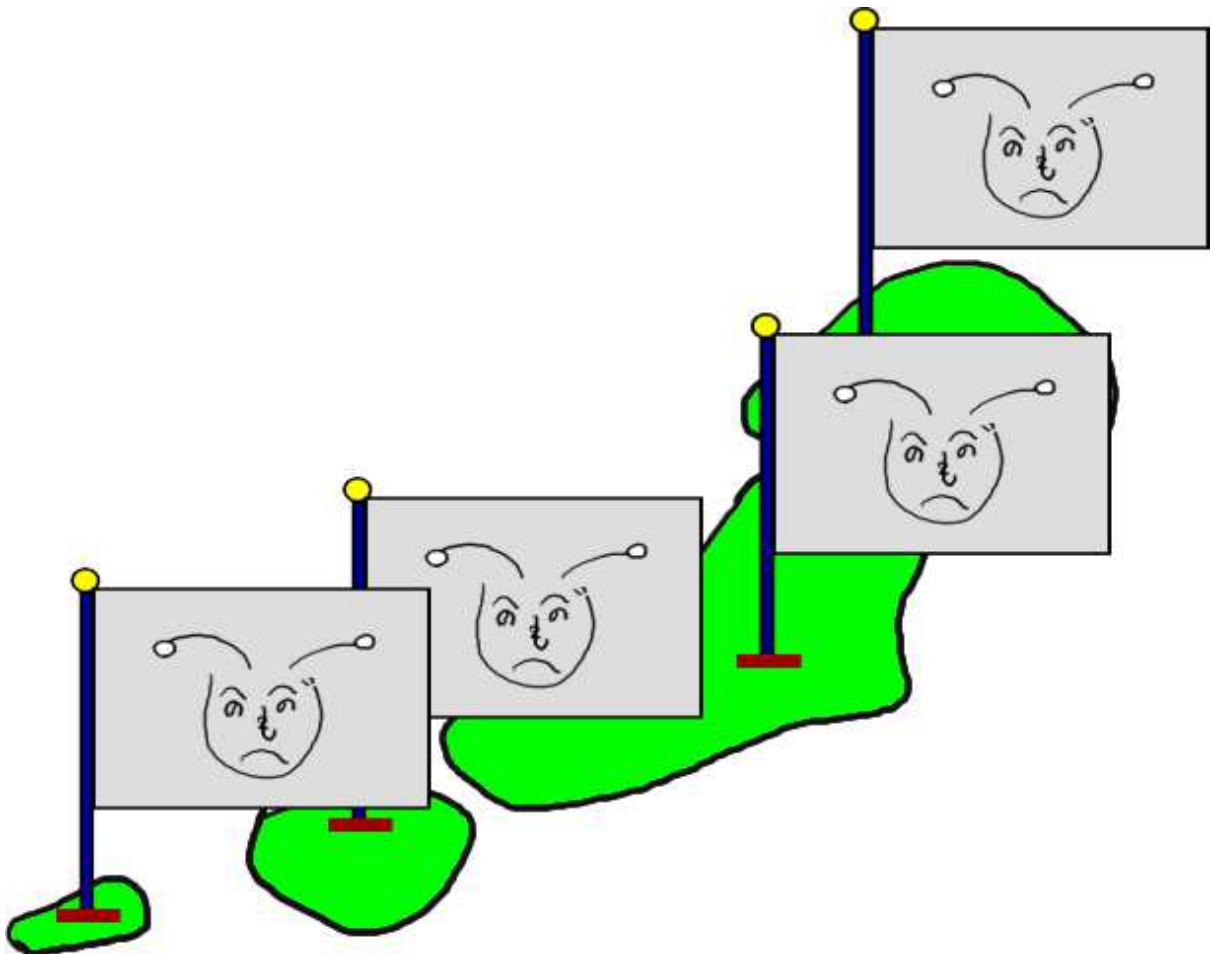
**「大統領、もしあんたが勝手に
謝罪などしたら、大統領といえ
ども、命の保証は有りませんぞ」**



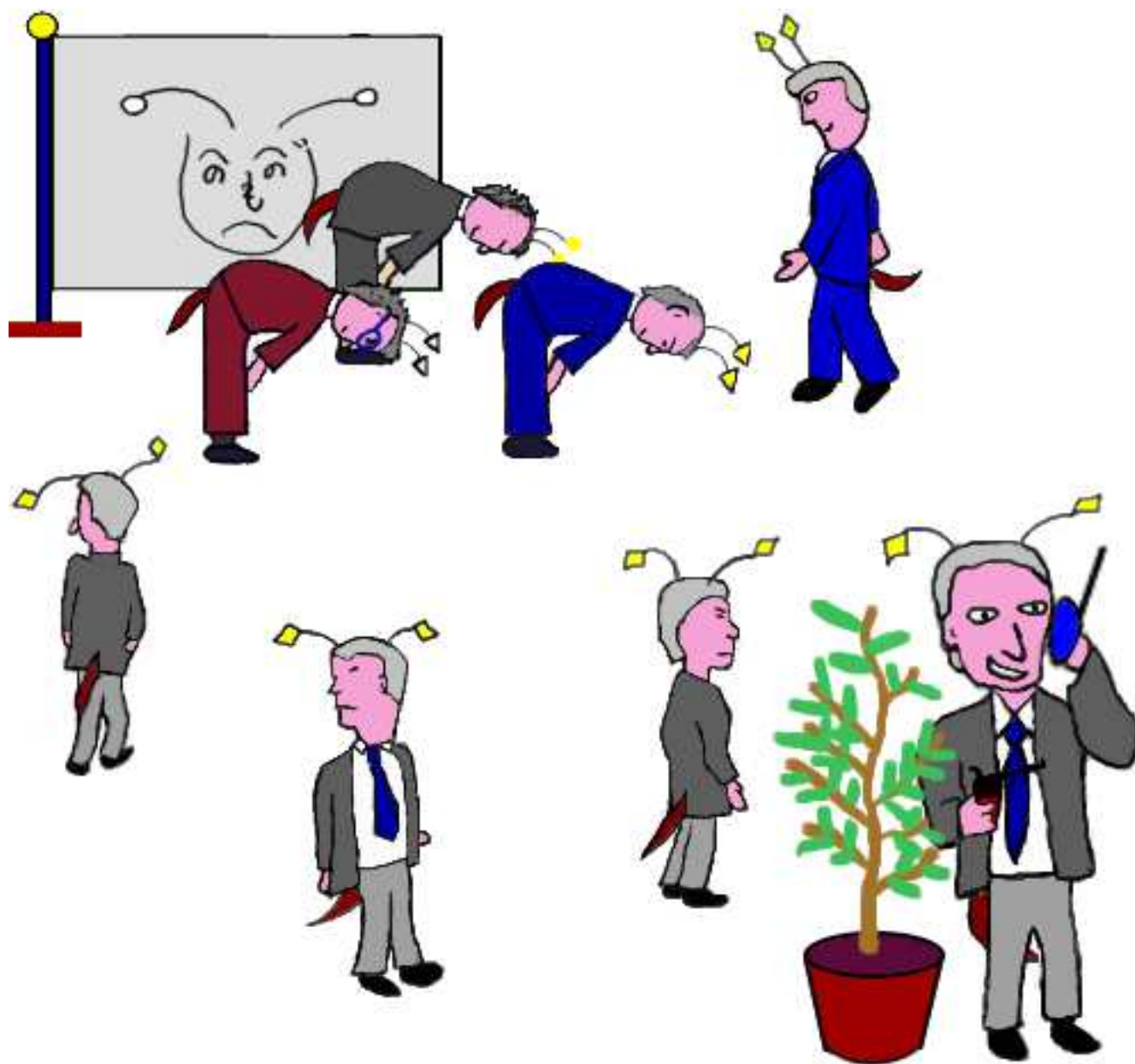
**閣僚たちは、全員で大統領を脅迫した
のです。**

その後、大統領は、昔の敵国、三角の触覚を持つ人々の国を訪問しました。

大統領の国は、戦争に勝利した後、この国に100箇所以上の軍事基地を作りました。だからもう、この国が逆らうことは有りません。



大勢の警官やガードマンが大統領を常に囲んでいます。—その中には、大臣たちのスパイもいるようです。

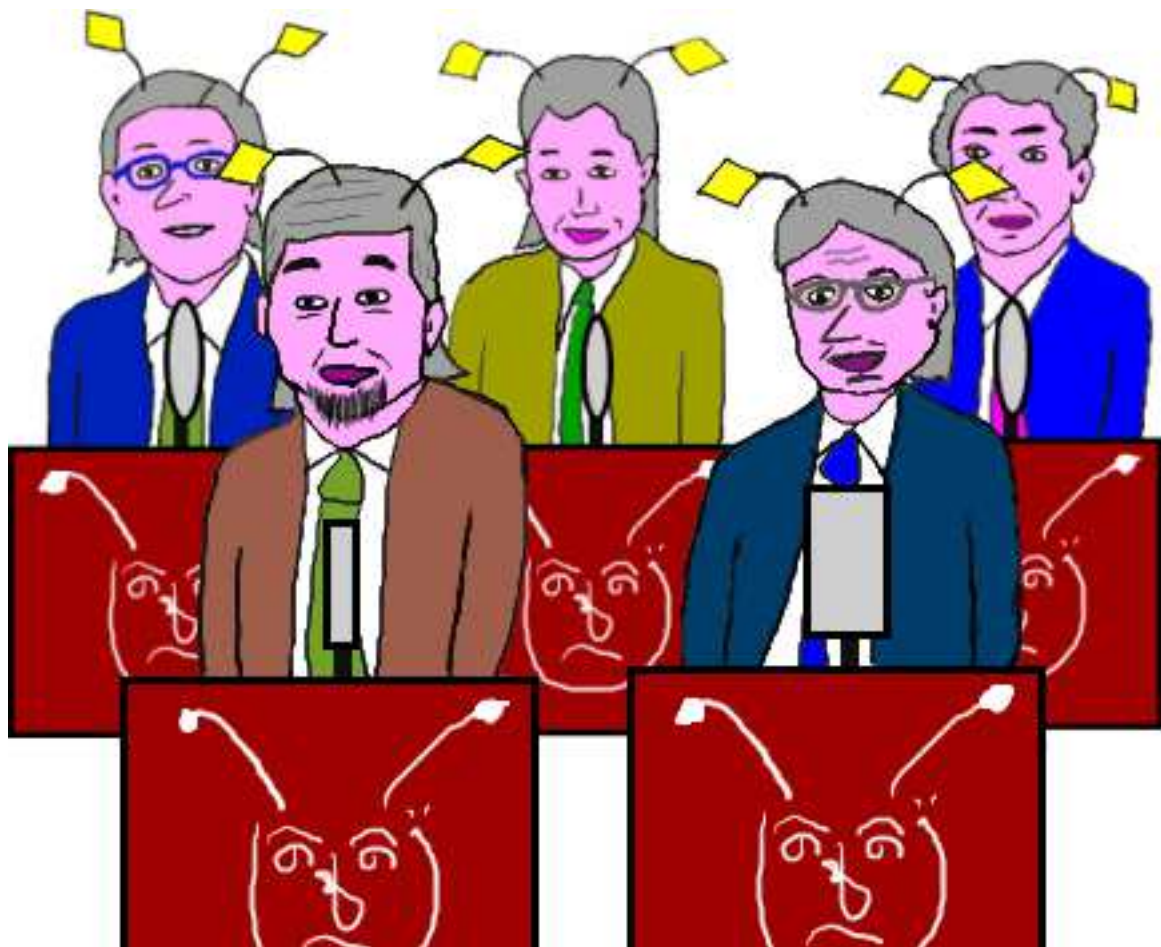


トイレに行った大統領は、突然、窓から外へ抜け出しました。サングラスとマスクで変装し、そして電車に乗り込んだのです。



さて、大統領が向かったのは80年前、
大統領の国が原子爆弾を落とした町の
一つでした。現職大統領でこの町を訪
問するのは彼が初めてです。

**「正しいことをしたのだから、
謝る必要は無い」**



過去の大統領は、みな同じことを言い
続けて来ました。

むろん、この星の人々はこれを聞いて
恐怖に震え、軍備や核兵器を増やし続
けています。

大統領は、原爆を落とした町にある、原爆記念館の前で変装をときました。そして、訪問者のサインブックに、大統領とサインをしました。

もしもし、
テレビ局ですか？
今、大統領が
ここにいますよ！



気づいた人々がびっくりしています。

大統領は、たった一人で原爆記念館を見学しました。黒こげの子供。ケロイドの人。放射能で髪の毛を失った女性。—そこには、地獄がありました。



それから大統領は、花を一輪持って原爆慰霊碑に向かいました。大勢の人々が集まって来ました。



大統領が、原爆慰霊碑に花を手向ける姿は、テレビで全世界へ向けて放映されました。

大統領の長い黙祷が終わりました。目を上げたとき、大統領は泣いていました。



「大統領、お話を」

「今、私は、わが国が原子爆弾で殺した何十万人の人たちへ、献花をしました。私は、この献花で、わが国を悪と裁くものではありません。もちろん、我々と

戦ったあなたがたを悪と裁くものでも
有りません。

誰かを悪だと裁くことは、

『私はその人を理解せずに憎み
ます、罰します、戦います』
という、宣言以外の何物でもないから
です」



世界中の人々が、テレビを通して、大統領の姿を見ています。テロリストも、敵国の政治家も、大統領の国の閣僚も、です。



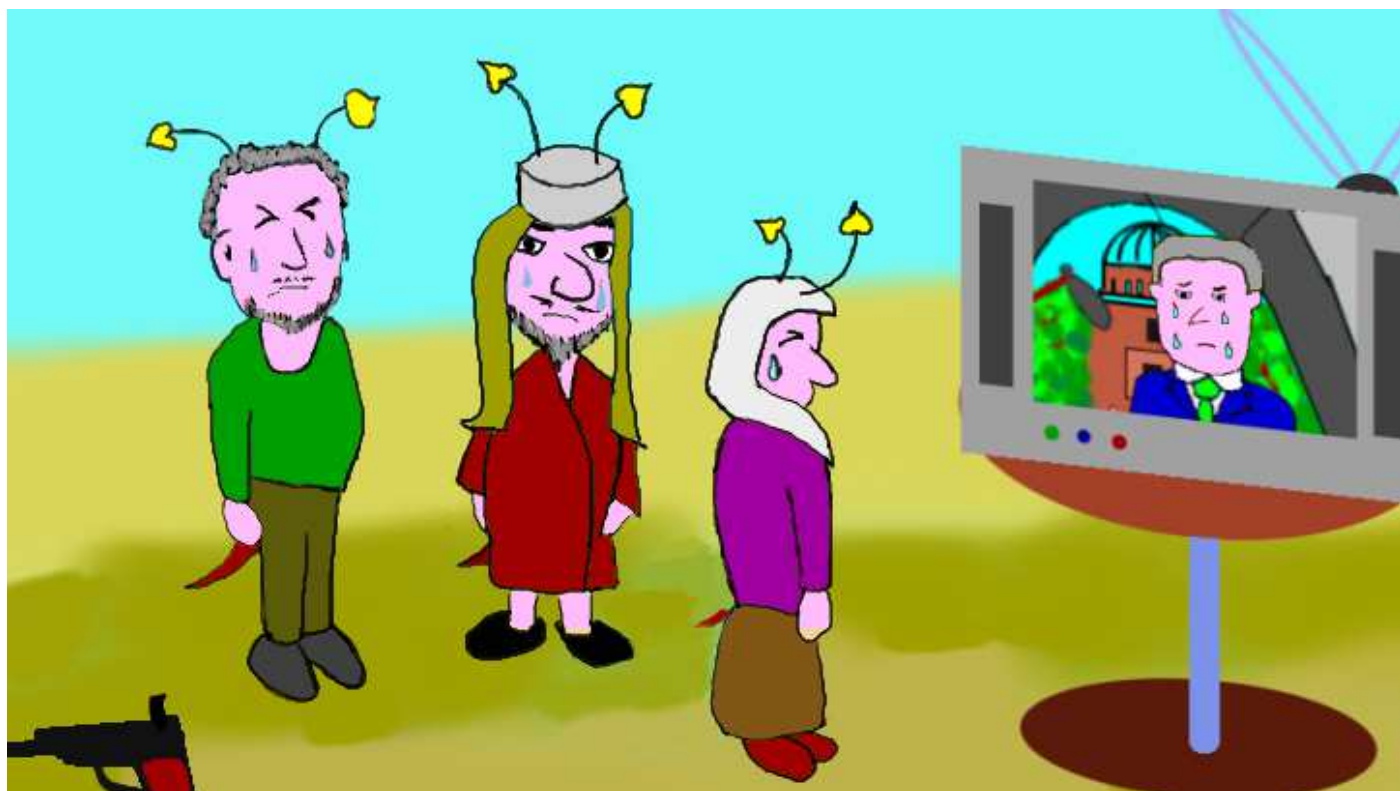
「…私の献花は、原爆の犠牲者への、無条件の深い同情、そして私たちの身を焼くような後悔を現すために、行ったものです。つまり、この花は、善悪ではなく、我々のあなた方への、愛を象徴するものです。

愛の花は、善悪を超越したところに、咲くのです。我々の友人たちよ。どうか、このたった一本の花を受け入れて欲しい。そして、私たちが与えてしまった、あなた方の痛みを、これからはあなた方だけの痛みではなく、自分たちのも

のとして、友人として、共有することを許しては貰えないでしょうか」

大統領のスピーチを聞いた世界中の人々が、いつのまにか一緒に涙を流しています。戦争の準備をしていた敵の国の人々も、テロリストたちも、大統領に反対した大臣たちも、泣き出しました。





原爆は、もう、使えない！



むろん、平和公園に集まった群衆たちも泣いています。その中には、あの老婆の姿もありました。



—そして、1000年が経ちました。
その後様々な事がありましたが、人々の
真剣な相互理解の努力の結果、今では
恒久的な平和が実現しています。軍備も
核兵器も博物館に陳列されたものの
以外は、全て廃棄されました。



初めて原爆慰霊碑に献花をした大統領の名前は、世界平和を達成する切っ掛けを作った偉人として、人々に語り継がれています。彼の墓には1,000年経った今でも花がいっぱいです！



あとがき 絵本「一輪の花」

誰かを傷つけたら、「ごめんなさい」。
この言葉で、人は人との信頼関係を修復
することが出来ます。

ではもし、この言葉を言えなければ、
どうでしょう？ むろん、人間関係は傷
ついたままです。心も癒えることはありません。
善悪の錯覚は、戦いの原因とな
るだけではなく、謝罪への道も閉ざしま
す。つまり、人と人との信頼関係を破壊
したままにしてしまうのです。

そしてもし信頼関係が無ければ、残るのは何でしょう？ —それは力に他なりません。

筆者はその力を象徴するものが、核兵器だと考えています。

もし、あなたがこの絵本に共感されたなら、他の方にも読ませてあげていただければと思います。

本絵本は、自由にコピーして下さって結構です（商業出版はじめ金銭的な授受を伴う場合を除きます）。 また下記WEBからは、東郷潤の他の絵本やメッセー

ジをダウンロードすることが出来ます。

www.j15.org

©Jun Togo 2006